熱川温泉病院

症　例　概　要　患 者：60代　女性

病 名：くも膜下出血

入院期間：2011年4月～（入院中）

【経過】

仕事中にくも膜下出血を発症した。開頭クリッピング術、外減圧術、VPシャント術、骨形成後膿瘍形成、急性心肺停止などの治療、気管切開等実施され、リハビリテーション目的で2011年4月当院に入院となった。

内　　容

本件はご家族を含めたOurTeamで目標に向かって介入した結果、食事の自己摂取が可能となり、諦めかけていた結婚式への参列を実現した事例である。

当院に入院して13年。その間、長女の結婚式に参列したことがあり、12月にある長男の結婚式を楽しみにしていた。しかし、7月にコロナ陽性となり、その後廃用が進行。FIMが20/126点まで下がった。意識レベルが低下し、傾眠傾向へ。食事摂取も困難となり、経口摂取量は0 ～ 1割程度。体重は3kg減少した。夫は長女の結婚式の時より状態が良くないため、「息子の結婚式に出るのは無理ですよね。」と看護師に漏らした。看護師は「大丈夫です。結婚式に向けて、奥さんも私たちと一緒に頑張ってもらいます。だから奥さんを励まして下さい!」と元気づけ、多職種カンファで想いを共有した。そして『結婚式に参列し、ご家族と同じ食事を食べる』ことを目標にチームで介入した。

①覚醒レベルの向上

リクライニング車椅子に乗車して刺激導入を行い、覚醒レベル向上に取り組んだ。看護師・リハ・相談員は毎日面会に来る夫に「目を閉じていても、反応がなくても、病室内で過ごして刺激を与えて欲しい」と伝え協力頂き、徐々に覚醒度が向上した。

②栄養状態の改善

コロナ罹患中、経管栄養を試みたが自己抜去があった。経口摂取が継続できるように、嚥下状態に合わせて食形態の検討を行った。ミキサー食に変更し、8月に入り全粥柔菜へアップした。食事だけでは

十分な栄養が取れないため、栄養補助食品を付加すると、徐々に食事摂取量が増え、9月末には栄養補助食品を中止することができた。

③食事自己摂取に向けて

食事はスタッフが全介助で行っていた。8月にベッド上から食堂へ場所を変更し、自己摂取に向けた介入を開始した。手の筋力低下のため、スプーンの種類を替え、柄の部分を大きくし握りやすく工夫した。スタッフが付き添い、食事の手が止まると促し声かけをし、自己摂取できるよう介入を継続した。11月、米飯食・副食1口大の評価をSTが行い、むせることはなかった。患者さんも「やはり米飯にして下さい」と話し、食事形態をアップし、披露宴で食事を摂取できると判断した。

夫はコロナ罹患前の状態に回復したことで、「これで不安なく妻を連れていけます」と安心された。患者さんは「パパから結婚式の事を聞いた」と話し、結婚式のイラストを作成しながら当日を迎え、東京のホテルで開かれた披露宴ではご家族や大勢の皆さんと一緒に食事を楽しみ、幸せなひと時を過ごせたとスタッフに報告して下さった。